



第 1 部

通史 [1954 - 2003]

四季の訪れを告げる花々のように、

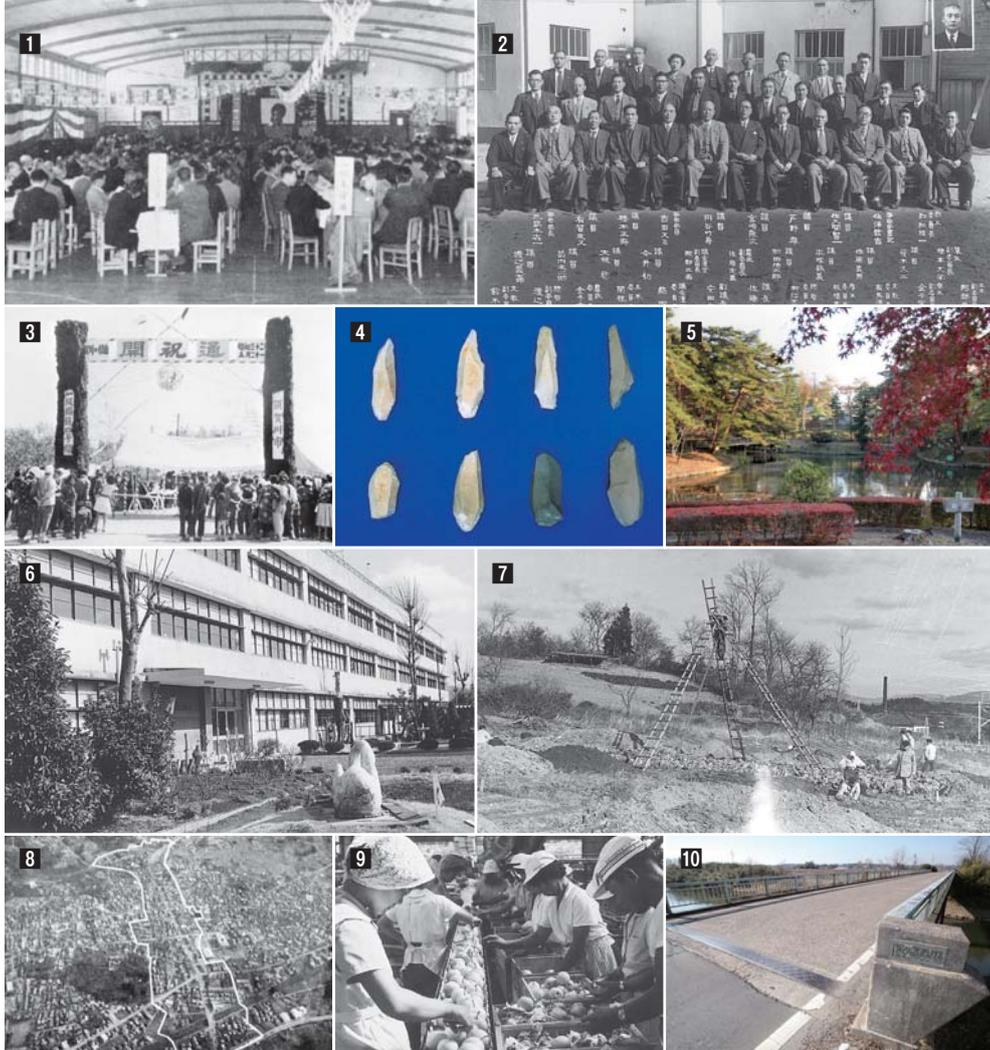
須賀川の歩みもまた華やかな彩りに満ちている。

そんな色とりどりの須賀川の出来事を

ダイジェストで振り返る、須賀川の色、いろいろ。

須賀川市制施行から梨の果実共同選果場設置まで

1町4か村が合併し須賀川市が誕生 新しい歴史と未来を創るために歩み始める



1市制施行祝賀式 (S29) 2第1回市議会議員選挙当選者 (S30) 3国道4号開通式 (S32) 4首藤保之助氏が阿武隈考古館資料を市に寄贈 (S33) 5昭和34年に誕生した翠ヶ丘公園 (写真は現在) 6市内初の鉄筋コンクリート校舎 (第三小学校) (S35) 7上人壇廃寺跡発掘調査風景 (S36) 8中部地区土地区画整理事業に着手 (S37) 9梨の共同選果場を設置 (S38) 10昭和38年に開通した宇津峰大橋 (写真は現在)

SUKAGAWA 1954~1963

須

賀川市は、昭和29年3月31日、岩瀬郡須賀川町、浜田村、西袋村、稲田村、石川郡小塩江村の1町4か村が合併して誕生しました。

市制施行とともに市歌と市章を公募、市歌の発表会は、素晴らしい公演として、全県下に放送されました。

昭和30年3月には、第1回市議会議員選挙が小選挙区制で執行され、議員30人が当選しました。立候補者は67人、投票率は実に91・53パーセントという高さ。新しい議会への市民の期待の大きさが感じられます。また、同年7月には、本市の主要農産物であるキュウリの全国へ向けた出荷もスタートしました。

昭和32年、東日本を縦断する現在の国道4号が東京から青森まで開通。その後、須賀川と郡山間はわずか15分で結ばれ、バスの利用者が急増します。交通量の増加とともに国道付近の開発や都市化が進行。国道開通が本市の発展に大きく寄与しました。

都市公園整備も行われました。



須賀川市歌・市章

昭和29年3月に誕生した須賀川市は、市制施行と同時に、市歌、市章を公募しました。市歌は、市内在住の男性の作品が選ばれ、本市ゆかりの詩人勝承夫が補作し、歌詞には緑あふれる豊かな自然や永い歴史、松明あかし、牡丹、乙字ヶ滝など須賀川の美しい情景が盛り込まれました。市章も市内の男性の作品を採用。「すかがわ」の「す」の字を図案化し、扇状の末広がりに市勢の発展を象徴したデザインとなっています。

翠ヶ丘公園は、大正12年に妙見山を公園としたのが始まりで、昭和34年10月、五老山、南館、保土原館などを含めて、改称して整備に着手しました。約30ヘクタールの園内は、市民の憩いの場となっています。

また、昭和36年5月と7月、翌37年11月には、須賀川地方初の本格的な発掘調査として上人壇廃寺跡の調査が3次にわたって行われました。なお、同遺跡は昭和43年5月、国の史跡に指定されました。

昭和37年に果樹基幹産地の指定を受け、本格的な果樹の栽培が始められました。翌年、西袋・仁井田両農協が梨の共同選果場を設置。選果作業の時間が短縮され、出荷数の増加につながりました。大正末期から始まったといわれる本市の果樹栽培。戦後は梨のほか、阿武隈川河畔ではリンゴの増植も行われました。日本経済が高成長期に入ると、果実も「量から質の時代」へと変わり、こうしたすう勢へ、いち早く対応したものとなりました。

市制施行10周年記念式典から東北縦貫自動車道・須賀川IC開通まで

感慨深い10年に更なる躍進を誓う 須賀川ブランド、全国の市場へ進出

昭

和39年10月、日本中の視線を釘付けにした東京オリンピックが開催され、大町出身の円谷幸吉選手がマラソン競技で銅メダルを獲得しました。折しも市制施行10周年の記念の年。この快挙は市民を大いに沸かせました。

昭和41年、本市の特産品である須賀川産のキュウリの出荷が初めて全国一を達成、同じく西袋産の梨もベトナムへの空輸を開始します。今日、国内外で愛されている「須賀川ブランド」の礎が築かれたのが、この時代でした。

そして、昭和44年10月には、旧第一小学校跡地に市庁舎が落成。木造平屋から地上4階、地下1階のモダンな建物に生まれ変わった庁舎は、本市の新しいシンボルともなりました。また、市民生活に関する課は1階に配置するなど各課の配置も分かりやすくなつて、より身近に行政を感じてもらえるようになりました。

昭和45年5月21日、昭和天皇香淳皇后両陛下が本市をご訪問されました。須賀川牡丹園を見学され

た両陛下は、満開の牡丹に歓声を上げられ、植物学者でもある昭和天皇は担当者へ専門的な質問をされるなど、楽しい時間をお過ごしになりました。

また、同年8月には、公立として福島県下初の市立博物館もオープン。本市出身の郷土史家首藤保之助氏が収集した貴重な考古・民俗資料などが展示されました。

昭和46年、本市は「公害のないあかるく豊かな近代田園都市」を都市像に、まちづくりの指針となる総合計画基本構想を策定しました。本市の総合計画はその後、時代の潮流や本市を取り巻く状況などを的確に捉えながら改定を重ね、第7次総合計画「須賀川市まちづくりビジョン2013」まで受け継がれ、市民との協働のまちづくりを進めています。

交通網が発達を見せたのも昭和40年代のこと。須賀川駅には特急列車「ひばり」が停車を開始。上野駅と2時間16分で結ばれました。また、昭和48年11月には東北縦貫自動車道須賀川インターチェンジも完成しています。

1964~1973 S U K A G A W A

1 円谷幸吉選手の故郷がい旋パレード (S39) 2 「須賀川広報」から「広報すかがわ」へ改称 (S40) 3 須賀川産キュウリの出荷が全国一に (S41) 4 須賀川地方衛生処理組合のごみ焼却施設が完成 (S42) 5 昭和43年頃の駅前周辺 6 落成当時の市庁舎 (S44) 7 牡丹園を見学される昭和天皇・香淳皇后両陛下 (S45) 8 牡丹台野球場が完成 (S46) 9 公立岩瀬病院創立100周年 (S47) 10 市図書館完成 (S48)

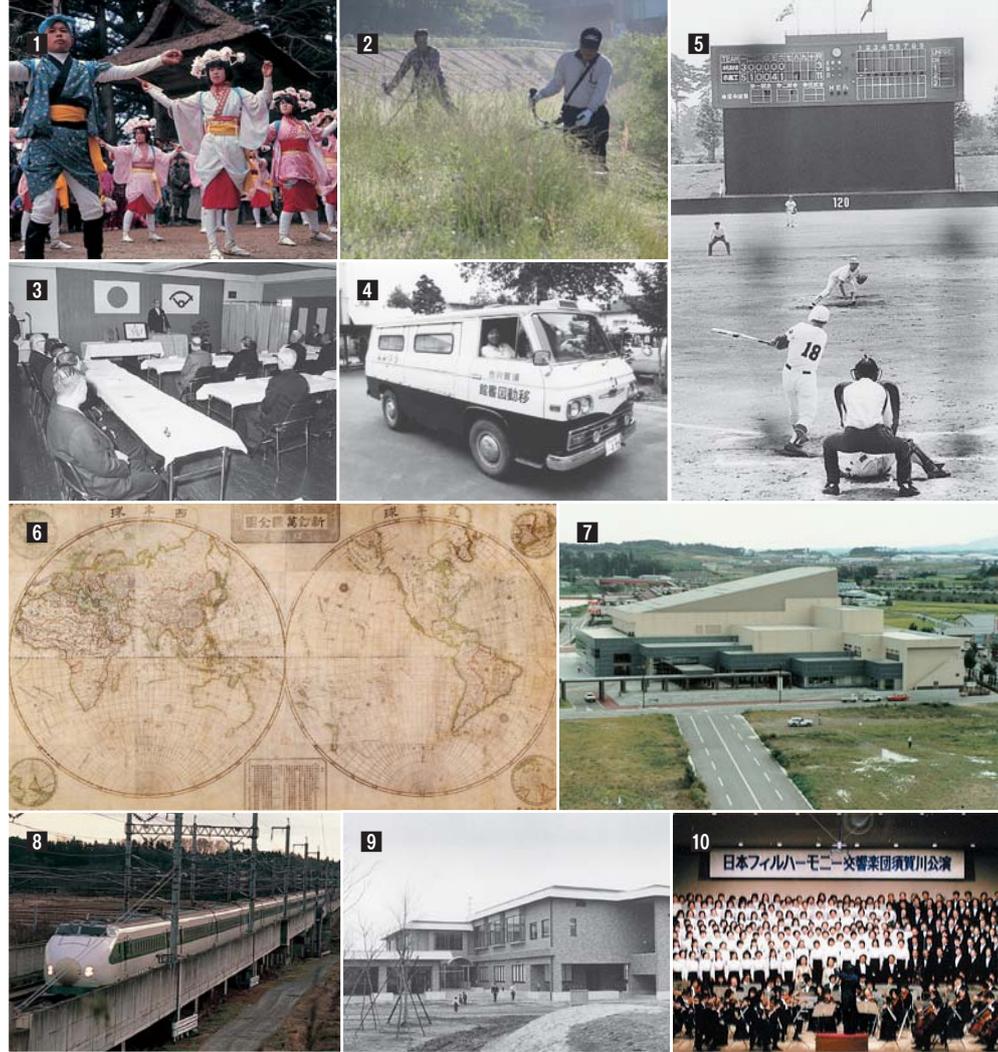


東北自動車道・須賀川IC

東京と青森を結ぶ東北縦貫自動車道の白河～郡山間が昭和48年11月に開通、同時に須賀川インターチェンジが完成しました。高速道路の開通により、首都圏との時間距離が短縮、経済交流の活発化による地方生活圏の整備拡充が期待されました。また、インターチェンジは東北地方の物流に大きく貢献。周辺にはトラックターミナルや配送センターなど流通業務施設が集まり、地場産業の発展を支えています。

市制施行20周年記念式典から市民温泉新築落成まで

優良都市として自治大臣賞を受賞 市民憲章、市の花、市の木を制定



1 33年に1度の古寺山自奉楽奉納 (S50) 2 昭和51年に始まった市民一日環境美化運動 (写真は現在の釈迦堂川ふれあいロードの環境美化運動) 3 優良都市として自治大臣賞受賞披露式 (S52) 4 移動図書館車「うつみね号」が運行開始 (S53) 5 牡丹台野球場にバックスクリーンとスコアボードを設置 (S54) 6 博物館の隣に歴史民俗資料館開館 (現在は統合)。写真は亜欧堂田善の「新訂万国全図」(S55) 7 文化センター新築落成 (S56) 8 東北新幹線の大宮～盛岡間開業 (S57) 9 市民温泉新築落成 (S58) 10 市民参加による「第九・合唱付」初演奏 (S58)

SUKAGAWA 1974~1983

昭

和50年9月、須賀川市出身の実業家・坂本鉄蔵氏が初の名誉市民となりました。坂本氏は常に郷土の発展に意を注ぎ、経済的な理由などで大学教育を受けられない若者のための育英事業資金として本市に1億円を寄付。9月には財団法人坂本鉄蔵育英会が設立されました。

昭和51年6月には、市内の社会奉仕団体などの協力で初めて市全体での環境美化運動が実施されました。現在は釈迦堂川ふれあいロードで行われています。

日本に地方自治が発足して30周年を迎えた昭和52年、本市は総合的に行政運営が優れているとして自治大臣賞を受賞しました。「住んで安らぎのある都市づくり」への成果や堅実な行政執行の理由となりました。

そうした都市づくりのひとつとして、昭和42年から11年間にわたって整備が進められてきた牡丹台運動公園が昭和53年3月に完成。野球場、テニスコート、



市民憲章・ほとん・あかまつ

市民アンケートをもとに、市民憲章と、市の花に「ほとん」、市の木に「あかまつ」が制定されたのは、昭和56年5月です。市民憲章は昭和60年4月、市内の中学生200人が一文字ずつ刻み込んだ市民憲章碑となって、当時の市庁舎前の「市民の庭」に掲げられました。「ほとん」は百花の王と呼ばれ、世界最大級を誇る牡丹園があることから選ばれ、「あかまつ」は当地方の代表的な樹木として選ばれました。

プール、体育センターなどが公園と一体となった新しいタイプの施設で、翌年7月には、牡丹台野球場にバックスクリーンとスコアボードが完成、高校野球大会会場の一つとして利用されました。

昭和56年5月、市民アンケートをもとに、本市のシンボルとなる市民憲章、市の花「ほとん」、市の木「あかまつ」を制定しました。

また、昭和57年には、福島空港の建設地が「須賀川東」に決定したほか東北新幹線の大宮～盛岡間が開通するなど、高速交通体系の整備が進められました。

市役所に開館日の問い合わせが殺到するなど、多くの市民が利用を心待ちにしていた共同福祉施設がオープンしたのは昭和58年4月のことです。温泉のほかに、茶室などの設備も充実した憩いの施設で、温泉浴室は、一度に50人が利用できる広さ。現在は、「市民温泉」として親しまれています。

市制施行30周年記念式典から福島空港開港まで

8・5水害で初の災害救助法が適用 翼に夢を乗せて福島空港開港

市

制30周年を迎えた昭和59年、市民憲章碑の建設、記念植樹、記録映画の製作などが行われました。

また、昭和60年は、俳句を通じた文化育成や観光客との文化交流の一環として、市内20か所に俳句ポストを設置しました。現在は、24か所になっています。

昭和61年8月4日から5日の正午にかけて、福島県は記録的な豪雨に見舞われ、釈迦堂川と阿武隈川が氾濫。本市に初めて災害救助法が適用される事態となり、市内各所に大きな被害をもたらしました。

須賀川牡丹園保勝会創立30周年を迎えた昭和62年には、牡丹園正面入り口に日本庭園と牡丹姫像が完成しました。牡丹姫像は、友好都市・中国洛陽市との末永い交流の証として製作され、同市王城公園の牡丹仙子像がモデルになっています。

昭和63年には、時代の変化に応え、次代を担う人材の育成を目指した新しいカリキュラムを備えた県立清陵情報高校が開校しました。

松明あかし400年を記念して奥州松明太鼓が創設されました。初披露は平成元年11月11日午前11時11分11秒。「1」が11並んだ瞬間。松明太鼓は、市の郷土芸能として今も多くの市民や来訪者に愛されています。

平成2年元日、制定が待望されていた市旗が青空に翻りました。白地にスカイブルーの色調は須賀川の「空」をイメージしたものです。

平成3年には市の玄関口である須賀川駅の新駅舎が完成。市役所業務の一部を取り扱うコミユニティプラザも併設されました。現在は、市民交流、観光物産振興施設として利用されています。

「住みよい環境づくり」の基盤のひとつ、公共下水道整備事業は昭和51年度から進められ、平成4年10月からは一部地域で供用を開始。豊かな自然環境を次世代に引き継ぐために、現在も事業は続けられています。

平成5年3月20日、福島空港が開港。須賀川駅新駅舎に続き、本市に新たな玄関口が完成しました。

1984~1993 S U K A G A W A

1 市制施行30周年記念植樹祭 (S59) 2 俳句ポスト設置 (S60) 3 8.5水害 (S61) 4 須賀川牡丹園正面入り口に日本庭園と牡丹姫像が完成 (S62) 5 県立清陵情報高校開校 (S63) 6 平成元年、松明太鼓初披露 7 市旗制定 (H2) 8 須賀川駅新駅舎落成式 (H3) 9 平成4年、公共下水道供用開始。写真は工事状況 10 花のまちづくりコンクール市町村の部で優秀賞受賞 (H5)



福島空港

平成5年3月20日、待望の福島空港が開港しました。午前10時40分過ぎ、大阪発の日本航空機が滑走路に着陸すると、詰めかけた2万人の見物客の間に拍手と歓声が沸き起こりました。一番機の就航に先立ち、開港式典も実施。福島県知事がファンファーレを合図に福島空港の開港を高らかに宣言した後、モニュメントの除幕式や旅客ターミナルの開館式など、次々に祝賀行事が繰り広げられました。

市制施行40周年記念式典から「すかがわ手作り市民劇」まで 「市の鳥」「市のマスコットキャラクター」を制定 国内初の森の中の博覧会「うつくしま未来博」開催



うつくしま未来博

須賀川市を会場に開催された「うつくしま未来博」は、日本で初めての森の中での博覧会として注目を浴びました。市うつくしま未来博ボランティアセンターの1300人を超えるスタッフが、PR活動や毎週日曜日の主要道路のごみ拾い、花いっぱい運動、駅での案内などを行い、全国からの来場者を温かく迎えました。



1 須賀川アリーナ落成 (H6) 2 ふくしま国体の卓球・銃剣道競技の会場に (H7) 3 きゅうりん館完成 (H8) 4 福島空港東側アクセス道路全線開通 (H9) 5 平成10年8月末豪雨災害 6 市のシンボルマーク「花のエンゼル」を制定 (H11) 7 福島空港2500m滑走路全面供用開始 (H12) 8 ムシテックワールド開館 (H13) 9 市指定文化財のうまや遺跡出土「和同開珎」と県指定重要文化財「稲古館古墳出土大刀」(H14) 10 市民劇「松明あかし物語」上演 (H15)

SUKAGAWA 1994~2003

平

成6年、市制施行40周年を記念し、市の鳥「かわせみ」と、マスコットキャラクター「ポータン」を制定しました。かわせみは阿武隈川付近で見られるコバルト色の羽に身を包む美しい小鳥。「ポータン」は松明あかしと牡丹をモチーフに、市内の小学生がデザインしたものです。

平成7年、ふくしま国体秋季大会開催。須賀川アリーナと市体育館で卓球と銃剣道競技が行われ、地元選手らも大活躍しました。

平成10年8月26日夕方から30日にかけて、「8・5水害(昭和61年)」以来となる記録的な豪雨が県南地方を襲い、阿武隈川流域にまたも甚大な被害をもたらしました。本市は雨水幹線や樋門・排水ポンプの整備事業を一層強化。国の「阿武隈川平成の大改修」とともに水害に強いまちづくりへの取り組みを進めています。

平成11年6月、福島空港の本格的な国際空港化の幕開けとして、上海便とソウル便の国際定

期路線が開設されました。さらに、翌年7月には2500メートル滑走路が全面供用を開始し、海外がより身近になりました。

国内外との交流はますます進められ、平成13年には、本市を会場として福島県博覧会「うつくしま未来博」が開催され、また、恒久施設として、ふくしま森の科学体験センター(愛称・ムシテックワールド)が同年11月に開館しています。

また10月には、牡丹焚火が環境省の「全国かおり風景百選」に認定されました。

文化面では若い力が大活躍。平成14年には、第一、第二中学校の合唱部が全日本合唱コンクール全国大会でそろって金賞を受賞。さらに第一小学校のマーチングバンドも全国大会優秀賞を受賞しました。

平成13年すかがわ手作り市民劇「明日を繋ぐ橋」平成15年には、松明あかしの発祥を庶民が主役でオリジナル劇を上演。10歳から82歳までのキャストやスタッフが須賀川の伝統を生き生きと描き出しました。